

おおむら いずみ
大 村 泉

学位の種類 博士(経済学)
学位記番号 経第74号
学位授与年月日 平成10年11月12日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 新MEGAと《資本論》の成立

論文審査委員 (主査)

教授 柴田 信也

教授 青木 國彦

教授 大谷 禎之介

(法政大学経済学部)

論 文 内 容 要 旨

標記の学位申請論文、「新MEGAと《資本論》の成立」は次の11章と附表からなる。

第1章 新MEGAと国際マルクス／エンゲルス財団

第2章 『資本論』の成立

－編集史および理論成立史の争点－

第3章 「資本と利潤」の成立

第4章 1861－63年草稿における第3部構想の成立

第5章 「機械」論草稿の成立

第6章 剰余価値論と工場法分析

第7章 エンゲルスによる第1部編集の根本問題

第8章 エンゲルス第3部編集への批判 [I]

－新MEGA編集者間の論争－

第9章 エンゲルス第3部編集への批判 [II]

－日本人研究者による再審－

附篇

第10章 『資本論』第1部初版本の伝承

第11章 マルクス稀観本の伝承

附表

MEGA 関連一覧表

本論文の第1章では、最初に MEGA (Marx/Engels Gesamtausgabe, Herausgegeben von der Internationalen Marx-Engels-Stiftung, Amsterdam: 国際マルクス／エンゲルス財団・アムステルダム編・新『マルクス／エンゲルス全集』全114巻)の編集方針、構成の特質を、既存の邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』(大月書店、全52巻)の底本となった "Marx/Engels Werke" と対比しつつ明らかにしたのち、この間激変を遂げた MEGA の編集＝刊行体制、MEGA 編集の現状をみた。

MEGA の企画立案以後、約4半世紀の間、その編集・公刊に責任を負っていたのは旧ソ連共産党中央委員会附属マルクス／レーニン主義研究所・モスクワと旧 DDR ドイツ社会主義統一党中央委員会附属マルクス／レーニン主義研究所・ベルリンであった。ベルリンの壁崩壊以後の旧ソ連・東欧諸国を襲った政治的激変を契機に両研究所は消失し、1990年10月2日以後、MEGA の編集・刊行の責任は社会史国際研究所・アムステルダムに本拠を置く、国際マルクス／エンゲルス財団が担うようになった。「国際協力」と「学術中心」。国際マルクス／エンゲルス財団はこの2つのコンセプトを MEGA の新たな編集方針に掲げるのだが、その具体的な内実は如何なるものであるのか。財団は具体的にはどのようなプログラムをもって MEGA の継続に乗り出したのか。財団の設立によって MEGA の編集＝刊行体制はどのような変更を被ったのか。世紀末を迎えるいま、MEGA 事業の到達点はどうであるのか。編集作業中の MEGA、構想中の MEGA 諸巻の概要はどうであるのか。MEGA 事業には今後どのような展望や可能性が存在するのか。MEGA 第II部『『資本論』および準備労作』を完結すべく設立された、日本 MEGA 編集委員会の設立経緯や課題はどうであるのか。現在財団は5つの研究機関すなわち社会史国際研究所、カール・マルクス・ハウス・トリーア、現代史文書保管＝研究ロシアセンター・モスクワ、社会＝民族問題ロシア独立研究所・モスクワ、そしてベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー・MEGA コミッションから構成されている。これら諸機関の設立経緯やコレクション、またそこでの MEGA の編集作業にはどのような特色があるのか。第1章はこうした諸問題を詳論した。

MEGA は第I部「著作、論文、草案」、第II部『『資本論』および準備労作』、第III部「往復書簡」、第IV部「抜粋、メモ、欄外書き込み」の4部からなる。本論文の第2～9章では、これら4部のなかで日本人研究者がもっとも大きな関心をよせている第II部を取り上げ、同部諸巻に収録されて初めて検討可能となったマルクス／エンゲルスの諸草稿やメモに焦点を当てた。

第2章では、既刊および現在編集中の MEGA 第II部全15巻24冊の内容詳細に基づいて、この間内外の多数の研究者を巻き込んで議論となった、『経済学批判』草稿(1861-1863年)や『資本論』

第1部諸版本のMEGAでの編集や、『資本論』第3部主要草稿（1864-1865年）のエンゲルス編集に関する一連の争点を、研究史の進展に即して概観した。

第3章以降では、そうした研究史で、申請者自身が当事者の一人として関与したり、関与しつつある主要争点に立ち入り、研究史の到達点を整理するとともに向後の諸課題を明確にした。

まず第3、4章では、草稿第3章「資本と利潤」（『経済学批判』草稿（1861-1863年）ノートXVI~XVII、MEGA第II部第3巻第5分冊、所収）に関する執筆時期確定論争の要点整理をおこなったのち、草稿同章と1861-63年草稿「5 剰余価値に関する諸理論」（=『剰余価値学説史』）における絶対地代論（ロートベルトゥス、リカードウ批判）の理論的連繫を解明し、これらを踏まえて『剰余価値学説史』の閣筆段階で成立した『資本論』第3部構想成立の意義を論じた。

第5、6章では、現代史文書保管=研究ロシアセンターでの原草稿の調査を踏まえて、「γ）機械。自然諸力と科学の応用」（1861-63年草稿ノートV、ノートXIX~XXII、MEGA第II部第3巻第1分冊および第6分冊、所収）は連続して執筆されたのか、あるいは『剰余価値学説史』を間に挟む相異なる時期に執筆されたのかという論争を吟味し、「機械」論草稿の独自性を剰余価値論成立史における新局面との関連で詳論した。

第7章では、『資本論』第1部改訂第2版（1872-1873年）マルクス自用本の「書き込み」および『『資本論』第1巻のための変更一覧表』（1877年、MEGA第II部第8巻、所収）の公表を契機に開始された『資本論』第1部に関するマルクスの「最終決定版」は何かという論争を扱った。ここではMEGA版『資本論』第1部諸版（MEGA第II部第8、9、10巻）のMEGA編集者「序文」における増補第3版（1883年）のエンゲルス編集に対する評価変更を解明し、同版エンゲルス編集の根本問題、すなわちエンゲルスは第1部第3、4版編集で依拠すべきマルクス草稿を誤認したことを明確にした。

第8、9章では1993年のMEGA第II部第4巻第2分冊の公刊を契機に本格的な議論が始まった『資本論』第3部主要草稿（1864-1865年）のエンゲルス編集に関する論争を取り上げた。第8章では、ドイツとロシアの新MEGA編集者の間で繰り広げられた論争に立ち入り、エンゲルスの第3部編集を吟味する場合留意すべき諸点を明確にした。またここでは旧ソ連共産党中央委員会附属マルクス／レーニン主義研究所の秘匿文書に依拠した研究を紹介することでスターリン主義がマルクス／エンゲルス研究に及ぼした影響の一端を解明した。

第9章では、第3部主要草稿に関する日本人研究者の研究成果を取り上げ、主要草稿の各章で日本人研究者が関心をよせている問題にはどのような問題があるのか、エンゲルス版とは区別される主要草稿の論理にはどのような特色があるのか、エンゲルスはマルクスの理論発展を草稿編集でどのように処理したのか、等々を詳論し、この間の研究史を総括すると共に向後の諸課題を明確にした。

MEGA第III部「往復書簡」にはマルクス／エンゲルスの書簡だけでなく彼らに宛てた第三者発信書簡も収録されている。これらの「宛」書簡は全体が公表されれば総計約1万点に達するという。この間こうした書簡の解明が本格化するなかで、マルクス主義の普及史研究にも新動向が形成

されつつあるとあってよい。国際的な『資本論』第1部ドイツ語初版(1867年)マルクス自筆献辞入り版本の伝承状況調査や国内大学図書館における同初版本の所蔵状況、東北大学附属図書館所蔵『哲学の貧困』マルクス自用本(1847年)ならびにエンゲルス宛マルクス自筆献辞入り『フォークト君』初版本(1860年)の入手経緯に関する研究などがその代表的な事例であろう。附篇に配した第10、11章では、こうした事例研究の紹介整理をおこない、最近のマルクス主義普及史研究における動向の一端を明確にした。

巻末の附表にはMEGAの編集状況一覧表、およびMEGA第II部の既刊部分と未完部分それぞれの収録テキスト一覧、既刊MEGA第I、III、IV部諸巻一覧を配した。MEGA編集状況一覧と、第II部未刊分収録予定テキスト一覧は、直接MEGA編集者から入手した当該巻の最新情報に基づくものである。

旧MEGAのスタイルで1939-1941年に公刊された『経済学批判要綱』(1857-1858年)を中心にした『資本論』成立史研究では内外でかなりの研究成果が公表されている。しかし新MEGAで初めて公表された諸草稿、メモを中心的な考察対象に設定し、射程を『経済学批判』草稿(1861-1863年)から最新刊の『資本論』第3部主要草稿(1864-1865年)に置き、かつ編集史上の諸問題を跳躍点においてそうした諸草稿、メモの理論的意義を包括的・体系的に解明しようという試み、同時に新MEGA編集の現在を問い、新MEGA編集に触発されたマルクス主義普及史研究の新動向に言及しようという試みは、まだ本格的な展開を遂げるには至っていない。本論文は、新MEGAで新たに公表された諸草稿を独自の視角から分析することによって、こうした研究史上の欠落を埋め、従来の『資本論』成立=普及史研究を補完・発展させようとしたものである。

論文審査結果の要旨

本論文は、1)現在、国際的な協力体制のもとで進行しつつある新MEGA(『マルクス・エンゲルス全集』)の編集・刊行事業について、その基本方針、その歴史的経緯や特質、現況等を、旧MEGAやMEW(『マルクス・エンゲルス著作集』)と対比しつつ、明らかにすること、2)このうち、なかんずく、MEGA第II部「『資本論』および準備労作」に着目し、そこに初めて収録されたマルクスやエンゲルスの諸草稿やメモ等を手がかりに、『資本論』体系に関する理論的・成立史的な諸問題について立ち入った考究を加えること、を目的としている。本論文の構成は、本論(篇)というべき、上記の二つの論点を直接的に扱った第1~第9章、マルクスの稀観本についての書誌学的考察(第10・11章)を包含する「附篇」、それに附属資料としての「MEGA関連一覧表」、の三つの部分から成っている。

本論文の特筆すべき貢献は、以下の通りである。まず上記2)についていえば、第一に、マルクスの『経済学批判』草稿(1861-63年)における第3章「資本と利潤」の執筆時期をめぐる国際的論争に主要な当事者の一人として参画し、同論争が最終的に著者の見解をもって決着し、それが

MEGA の編集に反映されるに至る一連の経過とそこでの論点、及び筆者の論拠が、現代史文書保管＝研究ロシアセンターでのオリジナル草稿の調査をも援用しつつ、詳細に跡づけられていること（第2～第6章）。第二に、筆者は、MEGA 第Ⅱ部第8巻所収の『『資本論』第1巻のための変更一覧表』（1877年）に着眼し、これを実現した版こそが『資本論』第一部の「最終決定版」たりうるのではないかとし、これによってエンゲルスによる第一部編集の当否を問うという問題提起を行い、これをめぐるその後の論争が、MEGA 編集方針に一定の実際的な影響を与えてきたこと（第2・7章）。さらに、『資本論』第三部の主要草稿（1864－65年）全般にわたる詳細な検討を通して、たとえば、生産価格論に関する現行版との異同を明らかにすることにより、ここでもエンゲルスにおける編集上の問題点について若干の論点を提起していること（第8・9章）。また1）については、新MEGA の編集・刊行体制に係る事実関係の紹介に主たる眼目があるとはいえ、その事業規模の膨大さとそれが歴史的に辿った複雑な軌跡を想起すれば、関連諸事項をコンパクトに整理する傍ら、必要な資料の蒐集や文献渉猟を不足無く行っていることは、それ自体一つの学術的価値を有するものといわざるを得ないであろう（第1章、「MEGA 関連一覧表」）。

マルクスの『資本論』体系をいわゆる「資本一般」の内発的な展開と規定する本論文の基本的観点については、そのより立ち入った論拠の提示は別稿に期待すべきものであろう。

以上により、本論文は当該分野における先駆的で貴重な研究として高く評価できる。よって博士論文として合格と判定する。